

風の人にモ土の人にモやさしい風が吹く

—ギュッと詰まった「リアスの恵み」がここにはあります—



物見山から見渡せる雪をかぶる北上山系は、車から降りて15分で出会う景色です



案内板を裏返すと樹木の名前が現れます



日射しが眩しい広葉樹の遊歩道



種山ヶ原で一番高い物見山を背に左から「森の案内人」の菊地さん、代表の佐々木さん、紺野さん

お問い合わせ 住田町役場産業振興課
電話 0192-46-3861



風の又三郎と出会う「種山ヶ原」

発行

岩手県大船渡地方振興局
〒022-8502
岩手県大船渡市猪川町字前田61
TEL.0192-27-9911
FAX.0192-27-1395
<http://www.pref.iwate.jp/~hp4501/>



※気仙新聞第3号は「遊び」を中心、「移住・交流」の情報を届けます。冬から初春の季節。冬至を過ぎて、日増しに春めく陽光に海は一年でもっと美しい姿をみせてくれます。そして春を待ちながら眠るように静かな森や里。心も体も思い切り「オフ」にできるフィールドがこの気仙にはあります。本紙が「第二のふるさと」探しのお役に立てば幸いです。

森の案内人と
散策を楽しむ

自然を大切にする人たちが増えているせいでしょうか。最近トレッキングがブームになっています。海と山に囲まれた気仙地方は、そのような人たちにとっては贅沢の宝庫。宮澤賢治がこよなく愛し、訪れたという「種山ヶ原」には、いまも賢治の気配を感じられるほどに素朴で美しい自然の驚きがあります。

お母さんみたいな山

気仙郡住田町には「森の案内人」というボランティア団体があります。

この団体の活動は、主に訪れる観光客や地元の子供たちと共に山や川を散策し、植物の名前や地元の文化などを案内すること。「住田の魅力を伝えたい」そんな熱意を持つ案内人たちが、訪れた人々に自然の楽しさや奥深さを伝えてています。

森の案内人の活動場所の一つに、種山ヶ原があります。種山ヶ原は、住田町・遠野市・奥州市などにまたがる高原で、宮澤賢治がこよなく愛する高原で、宮澤賢治がこよなく愛し数々の作品の舞台としたことでも有名。そんな種山ヶ原を、森の案内人の一人である紺野好子さんは「お母さんみたいな山」と言います。標高六百八百メートルのなだらかな傾斜は、年配の人や子供たちが登山気分を味わうにもピッタリ。頂上ま

で片道一時間半で到達できます。誰でも受け入れてくれる優しい山だから、お母さん。地元民らしい愛情深い表現です。

海かと思えば山だった

紺野さんは「この高原には風の又三郎が出るのよ」と言います。種山ヶ原は、内陸と三陸沿岸の気流がぶつかる地点。その為、今晴っていたかと思うと、突然強い風が吹いたり霧が出たりと目まぐるしく天候が変化するのだといいます。そんな自然が織り成す多彩な表情が、宮澤賢治の目には幻想的に映り、創作意欲を掻き立てたとも言われています。

物見山から眺めた景色を「海かと思えば山だった」と表現している賢治。一見、不思議な詩に思えますが、快晴の物見山を訪れてみると、そこからしばらく歩くと、今までの光景は、まさかの広大な平原

無邪気に笑う自分と出会う

遊歩道を歩いていると「ほれ、そこに!」はどこまでも続く水面のようであり、北に南に連なる山々は絶景そのものです。

こんな心の交流も、雄大な種山ヶ原が生んだ自然の恵みの一つなのでしょう。

地元の产品がいっぱい

「道の駅・種山ヶ原」は国道三九七号線沿いの種山高原の玄関口にあります。星をイメージした建物で、賢治の詩「種山ヶ原」の歌碑が建てられています。中では、住田町で採れた新鮮な野菜やきのこ、木工品などが販売され、お土産選びに最適。レストランでは、地産の清流鶏を使用した定食などが味わえます。



ゆっくりと休憩できる道の駅「種山ヶ原」

道の駅・種山ヶ原

電話 0197-38-2215

「遊林ランド種山」は種山ヶ原の一角にあり、森林散策の起点として使用する人も多い施設。ログハウス風の建物で、中にはレストランや、種山ヶ原を三百六十度見渡せる展望台、商店などがあります。サウナの付いた檜風呂の大浴場もあり、高原散策後の体を温め、疲れを癒すことができます。



ユニークな造りの「遊林ランド種山」

遊林ランド種山

電話 0197-38-2323

急いで、急がなくても、変わらないもの

福島正伸

今まで、岩手県に講演や研修などで、この十三年間に二〇〇回以上は来ている。沿岸地域にも、ここ数年、来る機会が増えた。そして最近は、新幹線とレンタカーで来ることが大変楽しみになっている。それは、東京から来る者にとって、その道のり 자체がとても心癒されるものだからだ。

東京から盛岡まで、三時間弱。そしてそこからが、私の大いなる楽しみの時間が始まる。一瞬、一瞬の景色が、私にとってかけがえのないものだ。だから毎回、違う道を通って、それぞれの道をゆっくり堪能しながら走るようしている。なくなく早く着きたくない。

先日、盛岡から大船渡までの道すがら、釜石までの新しい道路を通った。とてばららしい道路だった。地元の方々にとって、待ちに待った道路だったに違いない。しかし、道中を楽しみたい私にとっては、ちょっと早く着きすぎる。

冬こそ三陸の海は愛おしい

冬こそ三陸の海は愛おしい

冬から初春にかけての海はもちろん寒い。それでもこの季の三陸の海は太公望たちにとって特別な季節らしい。魚介類が一番美味しいのもこの季節。そして初春の海は一年で最も碧く美しく輝いて、見る人の目を飽きさせない。そんなこの時季の三陸の海の楽しみをご紹介致します。

◆海釣りを楽しむ

Uターンの浩丸さん

三陸の釣りの醍醐味を紹介してくれるのは、陸前高田市の釣具店「フィッシング・サンゴ」の店長 笠崎浩丸（ささぎき ひろまる）さん。浩丸さんは十年前に気仙にUターンしてきました。学生時代を東京で過ごし、卒業後一年間保険会社に就職。その後スペインに語学遊学し、その間にヨーロッパ各地を周って見聞を広めたとか。帰国後、故郷・大船渡で釣具店を営む兄から新店舗の店長として戻ってくるようにと強く請われ、「人生で最大の決断」の末に気仙に戻ってきたそうです。

店は「白砂青松」で有名な高田松原のすぐ近く、太平洋は目前にあり川釣りで有名な店がたっぷりの名物ラーメン



笠崎浩丸さん



お客様と一緒に釣った超大物の鰯

フィッシングサンゴ高田バイパス店
電話 0192-54-3484
URL <http://www4.ocn.ne.jp/~fsango/>

岩手のすべての道を、自分の運転で走るのが、私の夢の一つである。地図を見ながら、どの道を通って沿岸地域に行くかを考える時間が、また悦楽の時。勝手に岩手に来ると、急ぐことの無意味さを感じことがある。急いで、急がなくとも変わらないものがあることを実感する。そこにある山、草木、空気…。そして、その変わらないものが、とても新鮮に写る。たぶん、自然の中で、自分らしくゆったり生きたいと、心の中で思っているからだろう。きっと都会に住む誰もが思うことかもしれない。一種の憧憬と言える。

そして、何よりも私が大好きなのが、この地域の人である。都会には、とかく希薄な人間関係の世界があるが、ここに来る人と人がつながって生きていることを強く感じる。職種や業種を超えて、いつも人が集まる。これほどまでに、人が集まる機会を大切にしている地域が、他にあるだろうか。もちろん、複数の人が集まれば、いろいろなことが起るだろう。そんな時でも、一時間、二時間かけて、人が集まってきて、みんなで支えあう。

岩手の人は温かい。この温かさが、今一番、私をひきつける要因となっている。

たぶん将来、私は東京暮らしから離れると思う。その時、岩手は是非住んでみたい選択の一つになっていることは間違いない。

1958年、東京生まれ。早稲田大学法医学部卒業。84年（株）ビーボードを設立。後、人生をかけて出来る仕事を模索し、88年（株）就職予備校（現（株）アントレプレナーセンター）を設立する。現在、同社の代表取締役社長。通産省、労働省をはじめとした各種政府諮詢機関に委員を歴任。長年にわたり「いわて起業家大学」の講師も務めた。主な著書「起業家に必要なたった一つの行動原理」他多数



メガラは超高級魚でとても美味しい

気仙川の河口まで歩いても十分という恵まれたロケーションにあります。店には県内はもとより遠く関東方面からもたくさんのお客様が、太公望たちがやつて来ますが、そのお客様に仙の釣り情報を提供したり釣船案内をするのが浩丸さんの仕事です。

世界的にも希有な漁場

寒流暖流が交じり合うこの三陸沖ではここでしか捕れない魚種が多く、「釣り人の目で見たとき、この地域ほど魅力的な場所は日本にもあまりないです。世界的に見てもここはユニークな場所です」と浩丸さんは断言します。

そんな浩丸さんが、冬から初春にかけての釣りの楽しみを紹介してくれました。トッピングスターが冬場の「鮓（たら）」。鮓は二〇〇メートルの所でよく釣れるといいます。

日本でも鮓が釣れるポイントは三陸沖以外にはあまりないとか。次に「鮓（かれい）」。

鮓の時期は年に二回あり、一回目が十一月後半から一月半ば。これ以降は寒くなりすぎて釣れなくなるが、二月半ばから六月にかけて再び釣れ始め、ゴールデンウイークの時期がピークになるといいます。

そんな浩丸さんが、冬から初春にかけての釣りの楽しみを紹介してくれました。トッピングスターが冬場の「鮓（たら）」。鮓は二〇〇メートルの所でよく釣れるといいます。

日本でも鮓が釣れるポイントは三陸沖以外にはあまりないとか。次に「鮓（かれい）」。

鮓の時期は年に二回あり、一回目が十一月



穴通磯をくぐり抜ける「かっこ舟」

碁石観光遊覧船組合
電話 0192-29-3164
料金 お一人様 1,000円
※最少運行人数3人

Topics
「美味しい直売所探し」を楽しむ

Topics
海辺近くのりんご園

快適生活 探訪

高田松原周辺を歩く

陸前高田市の高田松原は約二キロに及ぶ松林と砂浜が続く「白砂青松」の景勝地。海水浴場としても有名ですが、最近は周辺に一年を通して楽しめる施設もできて客足が絶えることがありません。そんな高田松原周辺の楽しみ方を道の駅の駅長井筒さんに紹介してもらいました。



道の駅「高田松原」の駅長 井筒吉正さん



箱根山「市民の森」から眺めた「高田松原」周辺



世界の貝が揃った「海と貝のミュージアム」

松原周辺の楽しみ方

そんな高田松原周辺の楽しみ方を道の駅「高田松原」の井筒駅長さんが丁寧に教えてくれました。「車で来たならば道の駅の駐車場に車を止めます。まず松原をゆっくりと散策してみてください。一人よりも家族や愛犬などと一緒により楽しいですよ。駐車

暖な地域で雪がほとんど降りません。一月ともなると、写真のように明るい陽光が海に反射して、松原周辺を柔らかな光で包み込みます。そんな癒しの空間としての評価は高く、古くは昭和二年の「日本百景」をはじめ、「日本の渚百選」「森林の森日本百選」「都市公園百選」「緑の健康海岸」などたくさんのお墨付きをもらっています。

それというのも散策やジョギングに最適な高田松原や古川沼の周辺には、「道の駅」を中心に「野外活動センター」や「B&G 海洋センター」などのスポーツ施設が集約し、その一方ではホテルなどの宿泊施設、「海と貝のミュージアム」などの見学施設、そして買い物や食事を楽しめるスポットも多く、年齢に関係なく一年中楽しめるエリアだからです。

気仙地方はもともとが一年を通して温



一年中楽しめる癒しの空間

国道四五号陸前高田バイパスの途中に三角の形をした道の駅「高田松原」が見えます。駐車台数四四五台の駐車場は全国の道の駅の中でも多い方。オフシーズンの時期でも駐車場が満杯になることも珍しくないそうです。

場から見上げる松林を通り抜け、十分足らずで海辺に出ますから、潮の香りのする空気をいっぱい吸い込んで、波の音を聞きながらボートとしてみるのがいいですね。それからはマイペースで散策してみてください。南北二キロの松林を森林浴をしながら歩いたり、古川沼周辺を渡り鳥の姿を探しながら歩くのも楽しいです。

気仙の「柿」を味わう



たわわに実る気仙の柿の木

昔語り 金山



絵 庄司晴子

黄金の牛

あるとき、そこの金山で、黄金の牛の形の親金を掘り当てたんだ。みんなして大喜びで、坑内で酒盛りをしたんだ。ところあ、その中に正直者で金掘り達の飯を作る炊事方の三郎という若い者がいたんだ。

その三郎は、外で誰か呼んでいる声が聞こえた。んで出てみたども、誰もいなかった。何だと思つて坑内に入つたれば、みんなして太い綱ば、金塊さからげあで、引っ張つていったんだけ。三郎も一緒に引いていた。



四季を通して人気の「柿ソフト」

ぶらり三陸旅

2

八木健一郎の産直こぼれ話

「あわびのおちょこ」

港町三陸、祝いの席に欠かせないのが、あわびです。写真のあわび、身が入っていいないと思われるのも当然。漁師さん達は、このあわびの殻をおちょこ代わりに使ふんです。殻の穴を指で塞ぐと、お酒が注がれ:

一杯を飲み干すと同時に、また注がれ: 気づけばへべれけに出来上がり、無礼講よろしくさわぎ明かし、また、命を懸けた共同作業へと出かけて行

(このシリーズでは、「三陸どれたて市場」ハ木健一郎さんが、「三陸の潮風の香りのする市場」エッセイを書いています)

こんで、この話こ、おわり・・・。

「平泉の文化遺産」を世界遺産に



「平泉の文化遺産」は平成二十年の世界遺産登録を目指し活動しています。

十六世紀半ばまで氣仙は世で最も多くの金の産出する地域でした。氣仙の金は奥州平泉の黄金文化を支え、その贈はマルコポーロの「東方見聞録」によつて氣仙には金にまつわる昔話を残っています。今回はその中から「黄金の牛」を紹介します。

十六世紀半ばまで氣仙は世で最も多くの金の産出する地域でした。氣仙の金は奥州平泉の黄金文化を支え、その贈はマルコポーロの「東方見聞録」によつて氣仙には金にまつわる昔話を残っています。今回はその中から「黄金の牛」を紹介します。

十六世紀半ばまで氣仙は世で最も多くの金の産出する地域でした。氣仙の金は奥州平泉の黄金文化を支え、その贈はマルコポーロの「東方見聞録」によつて氣仙には金にまつわる昔話を残っています。今回はその中から「黄金の牛」を紹介します。

十六世紀半ばまで氣仙は世で最も多くの金の産出する地域でした。氣仙の金は奥州平泉の黄金文化を支え、その贈はマルコポーロの「東方見聞録」によつて氣仙には金にまつわる昔話を残っています。今回はその中から「黄金の牛」を紹介します。

